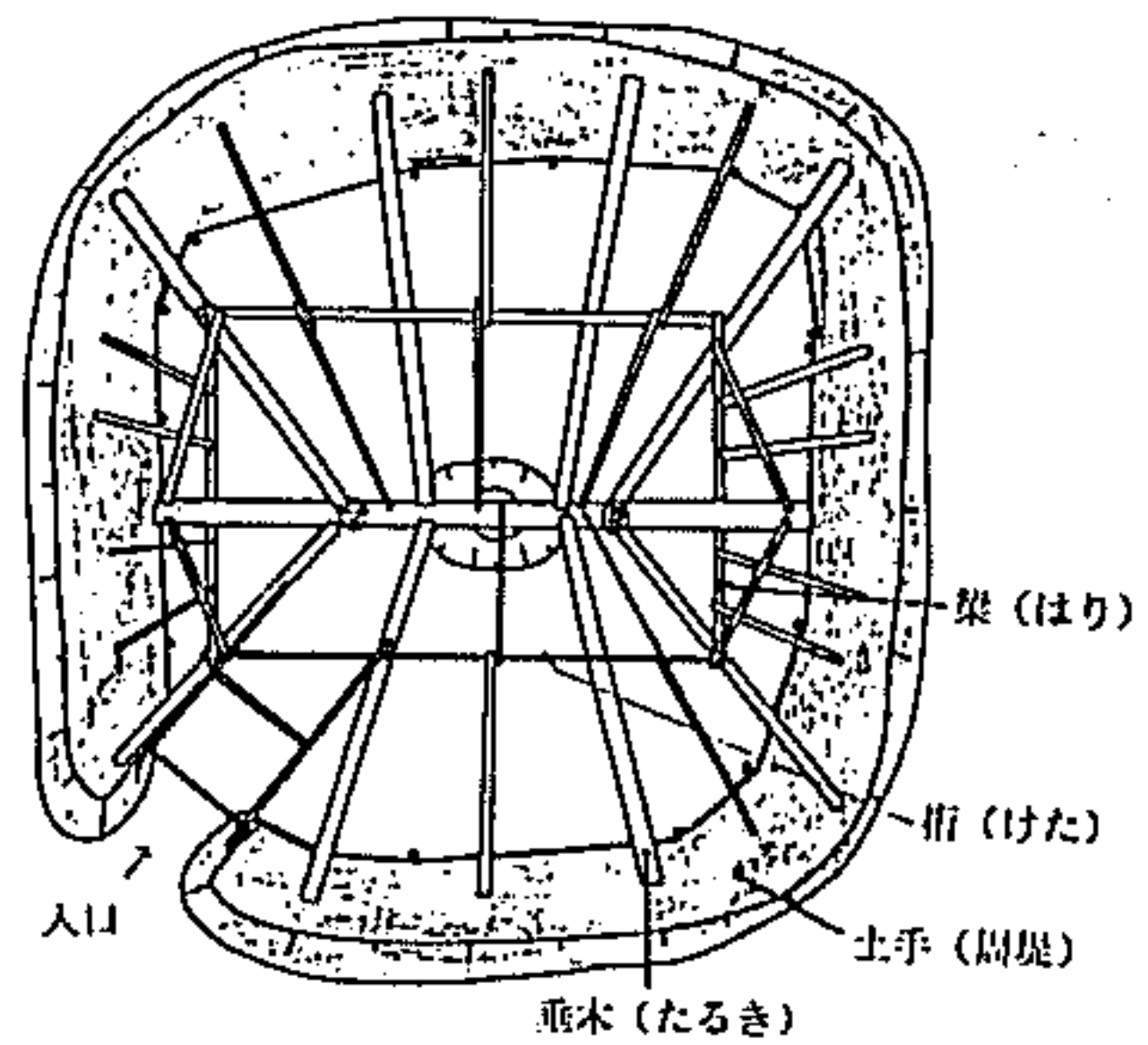
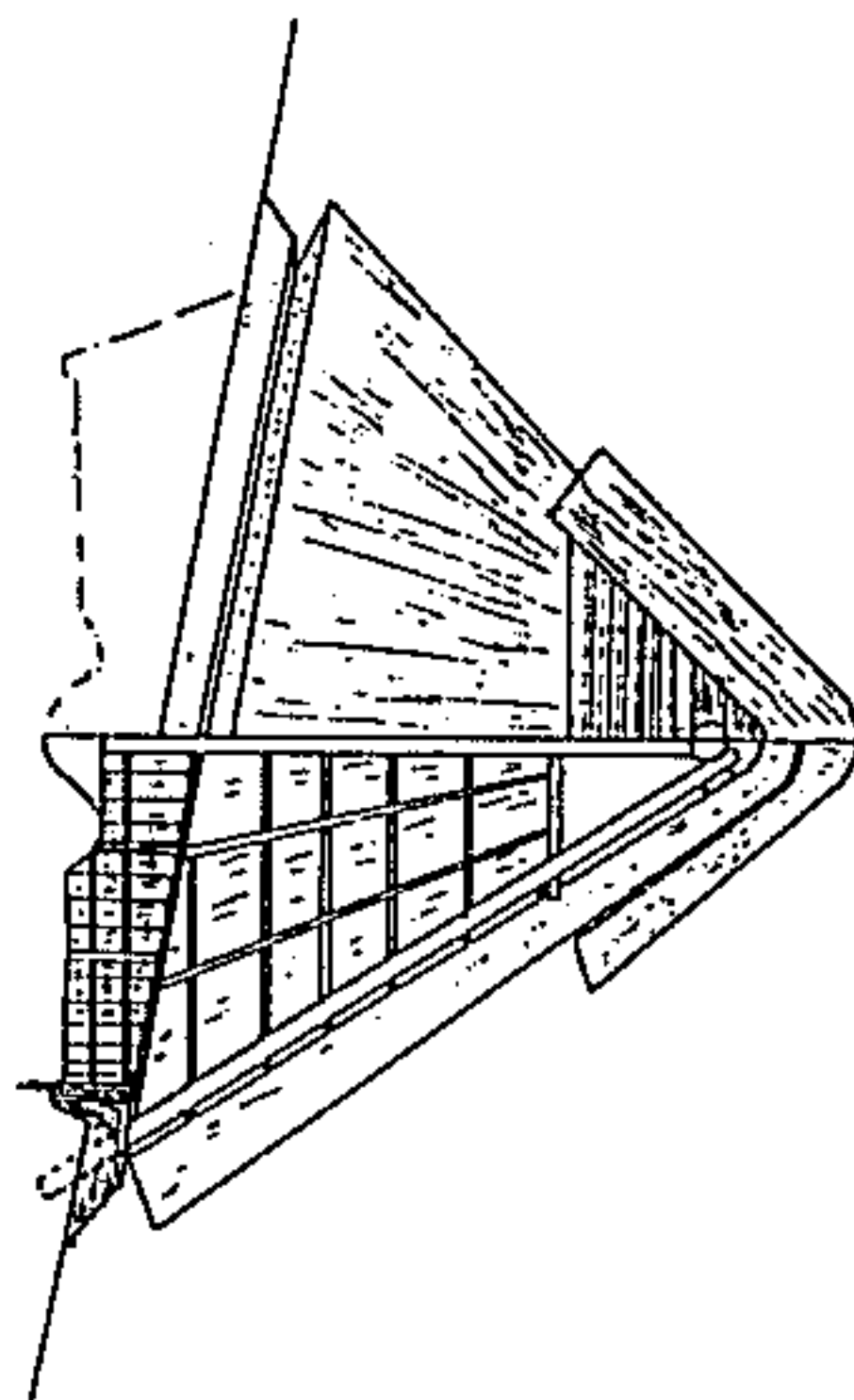
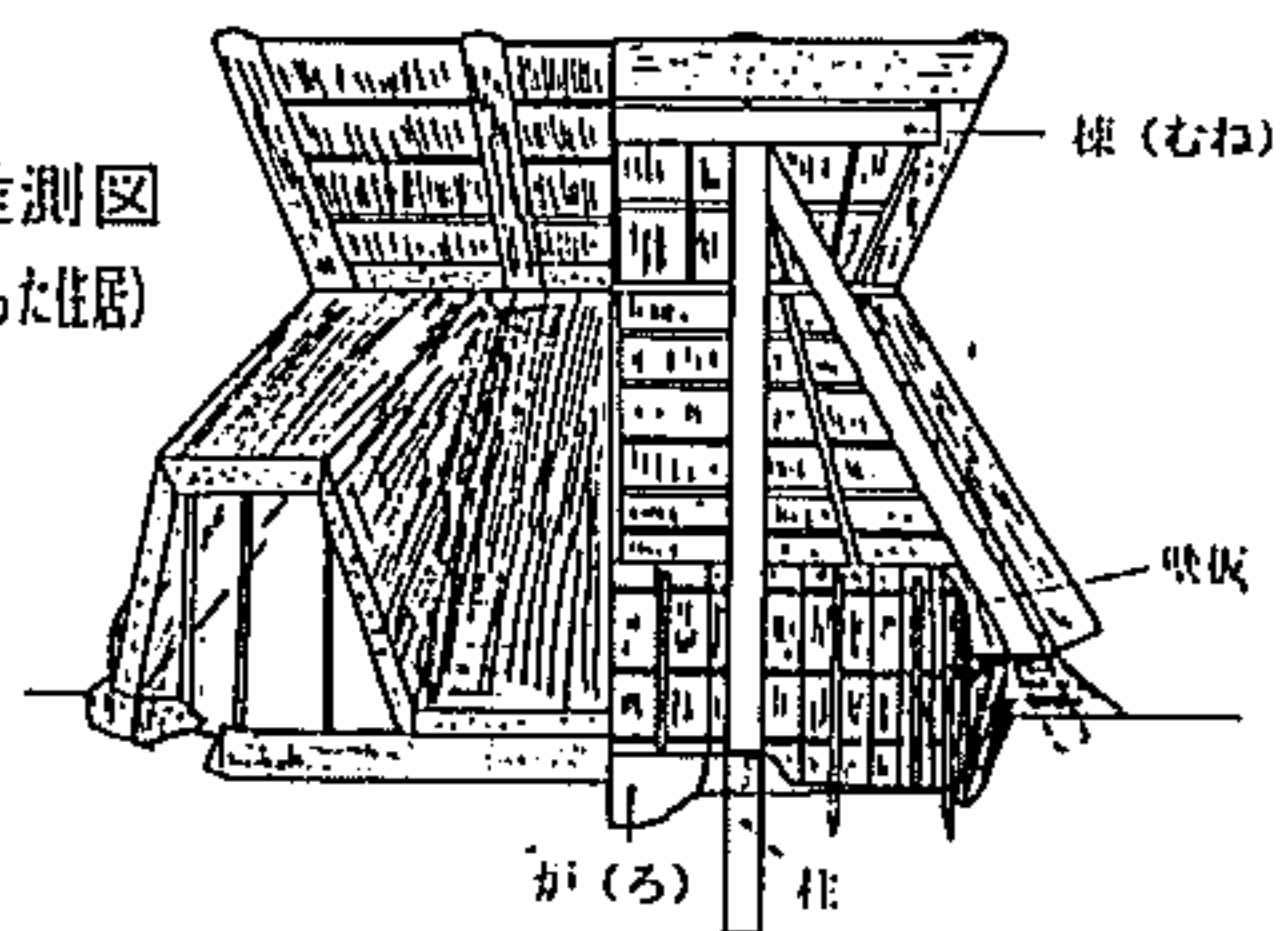
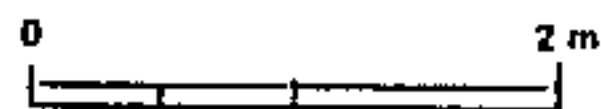


お こ え
小越遺跡・遺跡見学会

資 料



弥生時代の竪穴式住居の復元推測図
例：小越遺跡No22遺構（火災に遭った住居）



1996, 9, 29

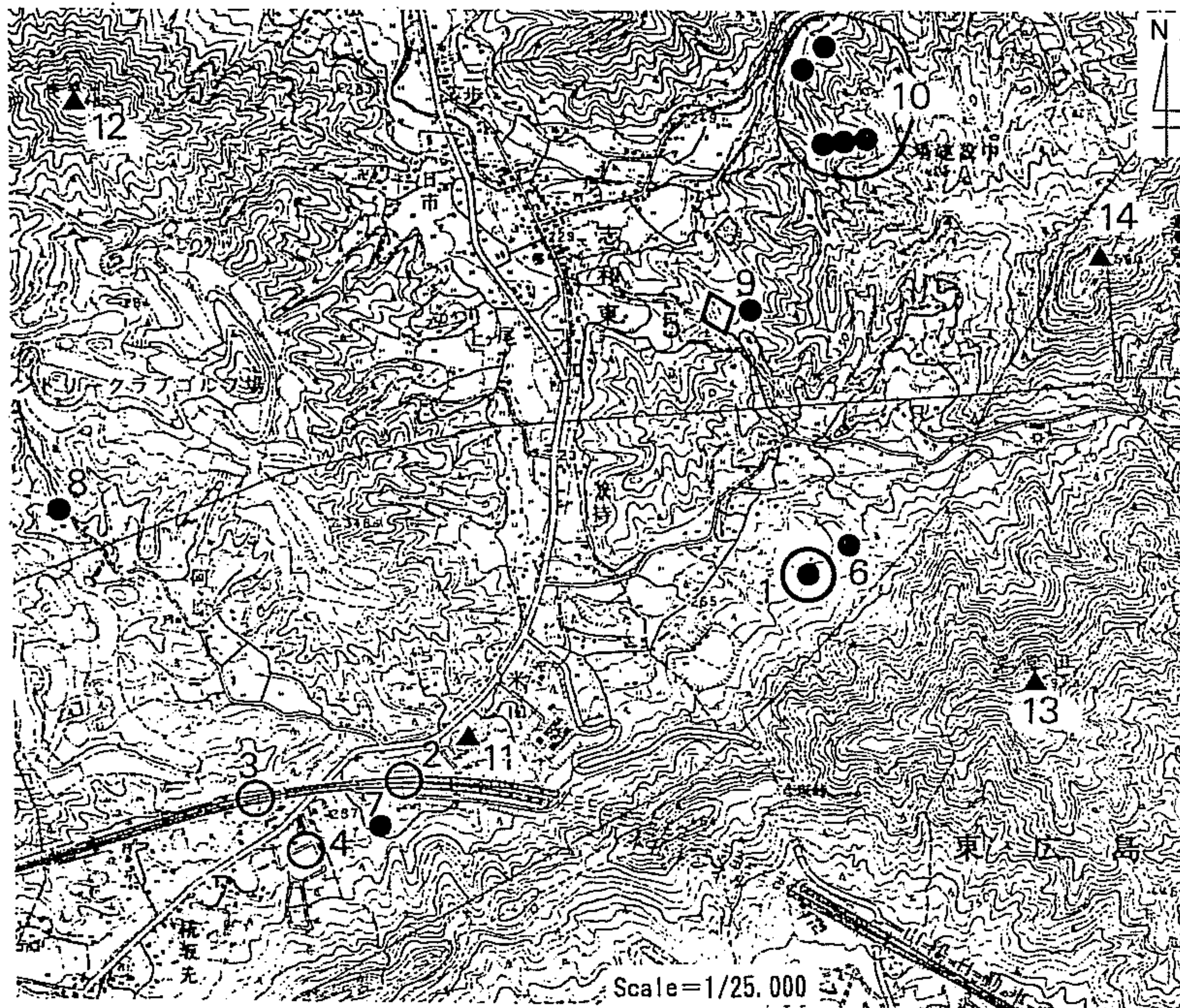
財団法人東広島市教育文化振興事業団
東 広 島 市 教 育 委 員 会

1. はじめに

小越遺跡は、東広島市志和町大字志和東字小越に所在する弥生時代の集落遺跡です。この遺跡の発掘調査は、流通団地の造成工事に先立つものとして平成7年度から現在まで、財団法人東広島市教育文化振興事業団／文化財センターが実施しています。

今回は、主に平成8年度（今年度）の調査区域を中心に説明しますので、住居跡や土器などを見て、弥生時代の集落の姿を想像していただきたいと思います。

2. 小越遺跡周辺の遺跡



遺跡名	時代	種別	遺跡名	時代	種別	遺跡名	時代	種別
1 小越遺跡	弥生	集落	6 小越古墳	古墳	古墳	11 米山城跡	室町	城跡
2 米山遺跡	弥生	集落	7 太刀掛古墳	古墳	古墳	12 生城山城跡	室町	城跡
3 峠谷遺跡	弥生	集落	8 阿原上古墳	古墳	古墳	13 清滝城跡	室町	城跡
4 南太刀掛遺跡	弥生	集落	9 蛇迫山古墳	古墳	古墳	14 弁財天城跡	室町	城跡
5 蛇迫山墳墓群	弥生	墳墓	10 塚土古墳群	古墳	古墳			

3. 小越遺跡の概要

小越遺跡は集落遺跡ですので、主に検出されているのは、住居跡や貯蔵穴です。以下、概要を見学順に概説していきます。

※ 図面に「No. 22」というように表記されているのは、調査順に番号を付けていったもので、この場合、この遺跡で22番目の遺構という意味です。

No. 26 (竪穴住居跡)

この住居は、下側半分がくずれています。平面形は円とも四角ともとれるような整わない形をしています。一番良く残っている所で、約3mの平坦面があります。

この住居跡の床面からは、石器を作る時に飛び散った石（安山岩）のカケラが約650点ほど出土しました。これらは、大きなもので約4cm前後、小さなもので約2mmのとても小さな物です。この住居からは、製品となった石器は出ていません。すべて作りかけか、作られた後に出るクズです。この住居は、普段の住いというには小さく、柱穴も小さいことから、石器を作るための作業場であったのかも知れません。

一緒に出土した土器から、弥生時代中期（約2000年位前）の住居と考えられます。

なお、この住居からは直径4cm位の卵の様な丸い石が1個出ています。

No. 24 (竪穴住居跡)

この住居跡も下側がくずれています。平面形は横長の楕円形で、長径約6mの大きさです。出土した土器から、弥生時代中期（約2000年位前）の住居と考えられます。

なお、この住居跡からもNo26の住居跡と同じ形の丸い石が1個出ています。同じ時期の近接した住居跡ですので、何等かの意図があるのかも知れません。

No. 23 (竪穴住居跡・焼失住居)

この住居跡も下側がくずれています。平面形は横長の楕円形で、長径約5mの大きさです。この住居からは、住居の柱材が焼けて炭になった状態で出土しています。また、壁は高温で焼けたため、非常に固くなっています。

土器は破片が多少出土していますが、完全な形に復元できるものはありません。土器の特徴から弥生時代中期（約2000年位前）頃のものと思われそうですが、今の所、厳密な時期までは判りません。

その他の出土遺物に、厚みの薄い土器の破片を利用して作った土製の紡錘車(?)が出ています。これは中心に穴をあけ、周囲を削って八角形にしています。

No. 22 (竪穴住居跡・焼失住居)

この住居跡は一辺が約3.5mで、平面形は角が丸まった四角い形（隅丸方形といいます）をしています。この住居も火災に遭っていて、内部から多量の炭化した柱材が出土しています。また、炭化した木材の中には、柱とは別に、直径15~20cm程の木を輪切りにした、椅子とも思えるようなものが立った状態で出ています。

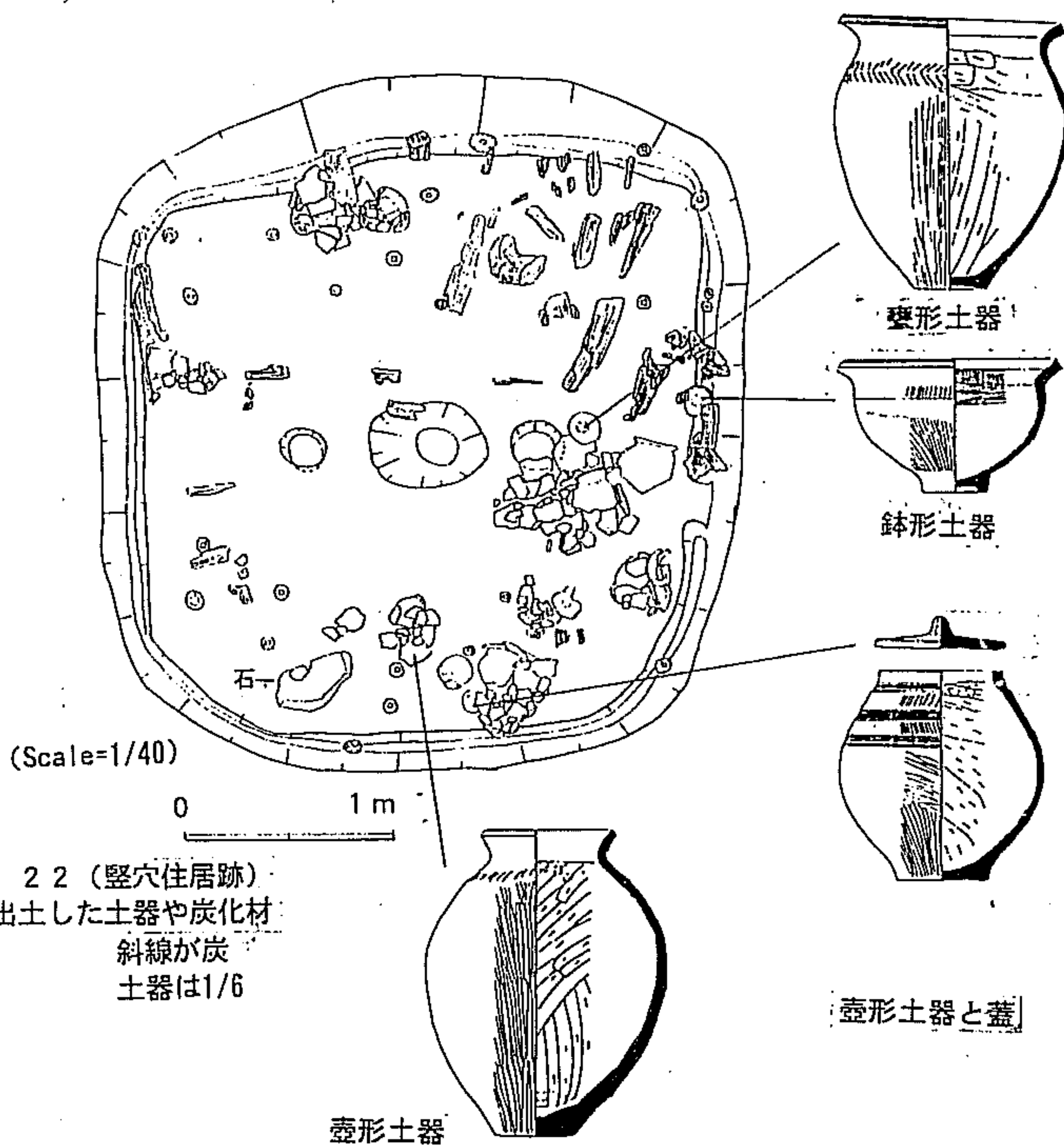
主要な柱穴は2個で中央に炉跡があります。柱穴とは別に小さな穴がたくさんありますが、これは家を仕切るなどしていた杭の跡だろうと思います。

この住居の中からは、この住居が火災に遭う直後に使われていた土器が、立っていた場所が判る状態で多量に出土しています。この土器群は、ほとんど完形に復元できる又はほぼ完形のままの土器が14点と、復元できない土器破片1点の計15点で、内訳は甕が7個、^{つぼ}壺が5個、^{ふた}壺の蓋が1個、^{はち}鉢が2個です。

私たちが発掘調査をしている中で、これだけの量の土器が1軒の住居から出てくる事はあまりありません。また普通検出する住居跡は、家を^{はいき}廃棄した後に土砂が溜まったものですから、家を廃棄する際に使える土器は持ち出されていますので、いらなくなった土器の破片しか残っていません。そうした意味から、この住居跡は、たまたま火災に遭って、土器も持ち出せなかったために、私たちにとってみれば、1軒の住居で使われていた土器の数や、ある限定された時期にどういう形の土器が同時に使われていたかといった事が明らかになる、まさに^{せんざいいちぐう}千載一遇の非常に貴重な資料です。

これらの土器は、弥生時代後期の初め頃（約1900年前）のものです。

この他、砥石などの用途に使ったと思われる台状の石が1個出土しています。



No. 13 (貯蔵穴)

土器などに食糧を入れて、保管していた穴です。おそらく地表面の穴の周囲には、雨水が流れ込まないように溝を掘るか盛り土して、木製の蓋か小規模な屋根を作っていたのでしょう。穴の中は蓋をしておけば、地表面と比べて寒暖の差が少なくなります。この穴は縦に掘られた穴ですが、横に掘られた穴だと最近まで穀物の貯蔵に使われていた『芋穴』と性格的には似たものです。弥生時代の冷蔵庫といったところでしょうか。

No. 10 及び 11 (竪穴住居跡)

いずれも小規模な住居跡で、No10は約3m、No11は約2mの、やや整っていない隅丸方形の平面形をしています。大きな柱穴は無く、直径10cmに満たない杭を打ち込んだような穴だけが床から検出されています。

No10からは土器はほとんど出ていませんが、No11では比較的多くの土器が出ています。

No. 12 (箱形石棺?)

これは、巨大な石の下敷きになっていたため、だいぶん壊れてしまっているようです。周囲の石組みと、蓋となっていた石があったので箱形石棺だったと思われます。

No. 3 (竪穴住居跡)

約4.6m×4mの隅丸方形の住居跡です。柱穴は4個あります。この住居跡の壁には通常の生活に使う甕や壺などよりずっと小さな土器(ミニチュア土器などと呼ばれています)が、壁土の中から出土しています。住居を作る際に地鎮のために壁に埋め込まれたのでしょう。

住居の中からは、弥生時代中期末から後期初め頃(約1900年位前)の土器の破片が少量出土しています。

この住居が棄てられたあとに溜まった土砂の中からは、弥生時代後期前半(約1800~1900年位前)の土器と一緒に鉄鏃(鉄のやじり)が1点出土しています。この鉄鏃は長さ約4cm・幅約3cm、重さ約5gの大きさで、この時代のものとしては比較的大形のものです。

No. 9 (貯蔵穴)

No13と同様に、土器などに食糧を入れて、保管していた穴です。深さは約1mあります。

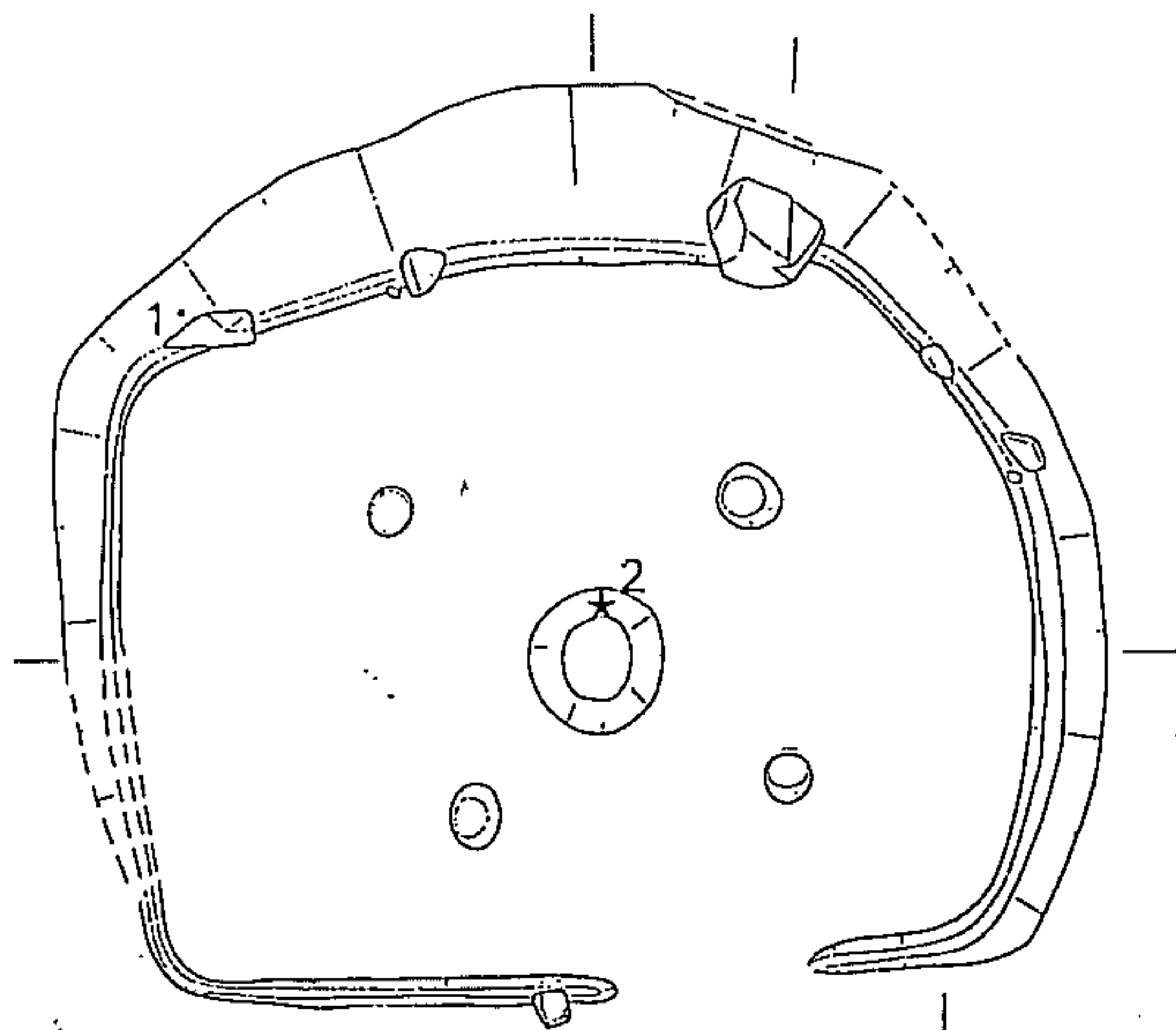
貯蔵穴は、保管庫として使われた後に、最終的にはゴミ穴として埋められて役割を終えます。この穴の内部には、土器のかけらが石や土砂とともに投げ込まれていました。

No. 7 (竪穴住居跡)

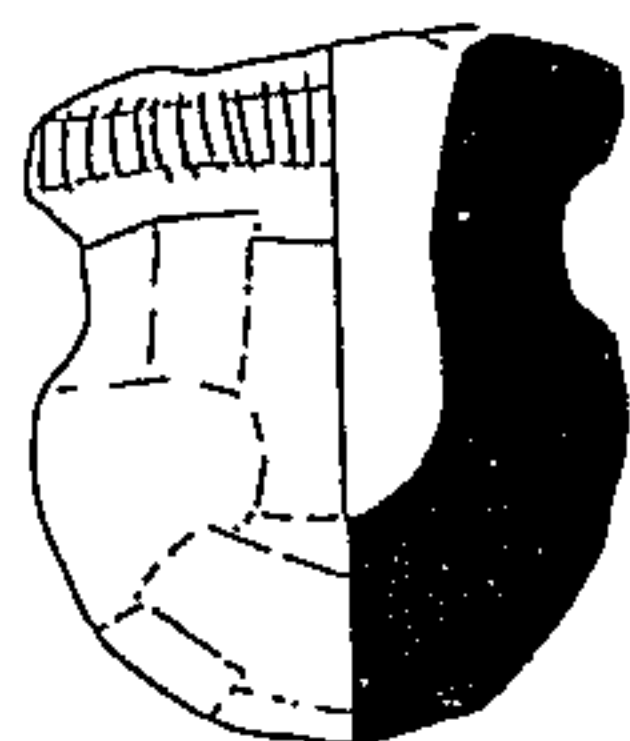
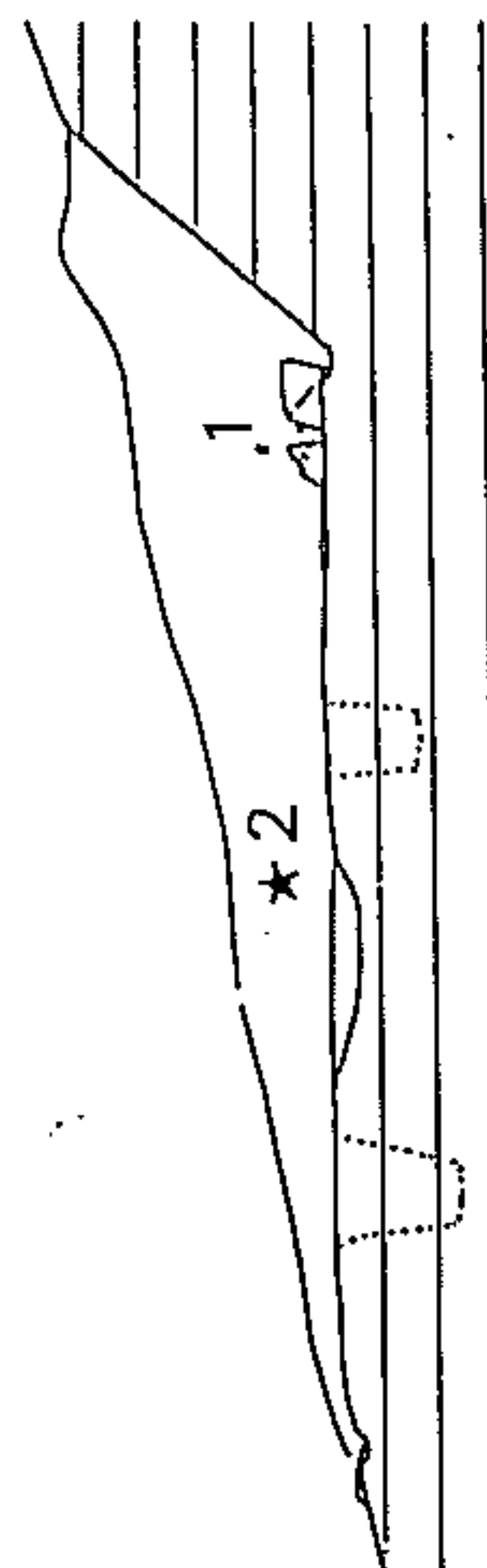
3m×2mの小規模な隅丸方形の住居跡です。柱穴が2個あって中央には炉の跡があります。住居の西側には谷が入り込んでいて急激に傾斜がきつくなっている場所に立地しています。

No. 1 (竪穴住居跡)

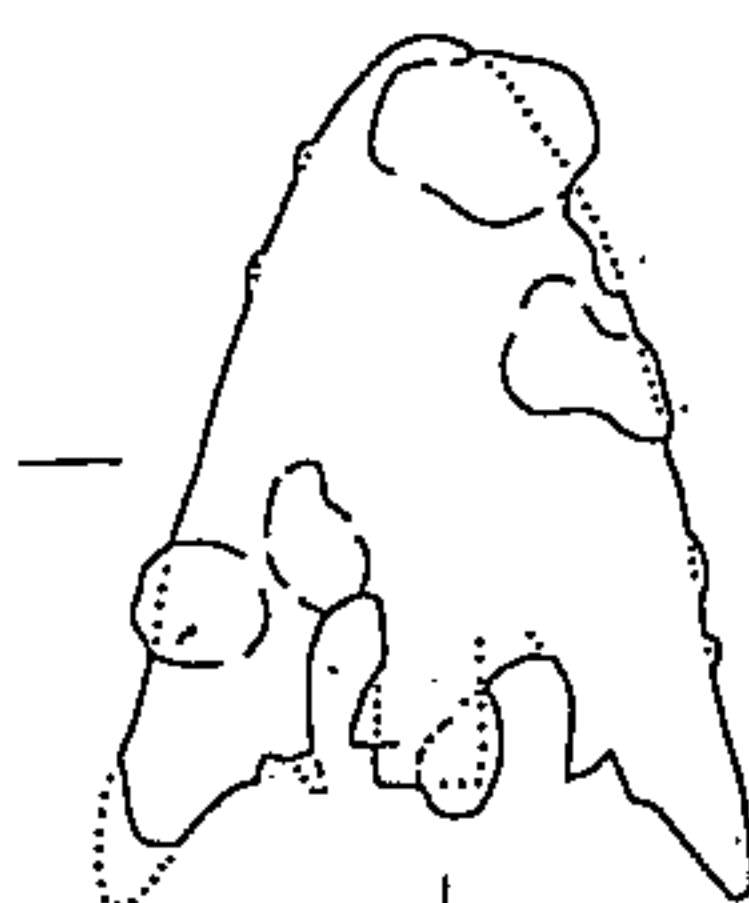
これは、斜面のややきつい場所に立地しているため、住居の山側の壁溝だけしか残っていません。床などはすべてくずれています。この溝から土器が出土しています。



平面図・立面図 (S=1/60)
No. 3 (竪穴住居跡)
出土遺物 (S=1/1)



1



2

4. おわりに

小越遺跡は、平地から約50m前後高い尾根の上に営まれた集落跡で、住居跡や貯蔵穴などが検出されました。これらは、弥生時代中期から後期前半にかけてのものです。

東広島市内の弥生時代の集落遺跡を見てみると、弥生時代前期から中期にかけては平野部に営まれるものが多いようですが、なぜか中期後半頃から後期にかけて、平野部から20～50m場合によってはそれ以上高い尾根の上に集落をつくっています。小越遺跡もその1つです。地区によって若干の時間差はありますが、足並みを揃えたかのように集落の立地を変化させていることは、この時期に何等かの社会的な動きがあったと思われます。ムラとムラの間又はクニとクニとの間の争いことから集落の立地を変えざるを得なかったように見受けられます。

弥生時代後期後半には中国の歴史書に出てくる卑弥呼が活躍しています。卑弥呼が活躍する前段階の社会状況を、これらの集落遺跡が示しているのかもしれませんが。



小越遺跡遺構配置図
(Scale=1/500)

